スムーズな教科学習への移行を目的とした「表現科」の実践と課題

宮崎大学 高橋るみ子
立命館大学小学校設置準備室 奥村江利子

Ⅰ はじめに

宮崎大学教育文化学部附属小学校(以下「附小」)に入学すると同時に，子どもたちの学びは，同附属幼稚園時代の総合的で未分化な学びから教科学習へと細分化する。しかし，5歳児の48%と1年生の42%は，こうした学びの変化に不安を感じている。そこで，附小は，緩やかな学びの細分化－英語を含む9教科を，第1学年では3教科に，続く第2学年から第4学年までは7教科に再編－を図り，子どもたちのストレスの軽減およびスムーズな教科学習への移行を探った。教科再編の目玉の一つである「表現科」は，図画工作科（以下「図工」)，音楽科，体育科へ発展していく前段階に位置づけられた，3年間（平成14～16年度）という期限つきの新教科である。

本研究の目的は，この表現科の実践について，教科再編の基本的な考え方に立ち戻り，再検証・再評価することにある。それは，今回の附小の評価が，表現科の今後に大きく影響すると考えるからである。

そこで，まず，再編の目的を具体化した新しい題材について，それらが「授業において現出させたい子どもの学習活動を先取り」したものになっていたかをふり返る。さらに，関係者に聞き取り調査を行い，表現科の学びの影響を，実際に表現科の学びを体験した現在の5年生の実態に探る。そして，それぞれの結果から，表現科の試行が，進学時のストレスの改善やスムーズな教科学習への移行に有効か否かを検討・考察する。

Ⅱ 本論

表現科は，音楽的な技能や感性を高める内容と，造形的な資質・能力を高める内容，そして，身体表現を核に教科の枠にとらわれずに広く表現を楽しむ内容（以下，「表現」）で構成されている。再編の基本的な考え方からすれば，「表現」の占める割合が多くなるはずであるがそうはならず，「表現」の時数は，各学年とも全時数の約10%である。しかし，新教科の実質は「表現」の活動にあると考える指導者・研究者により，気に入った音やリズム，色や形，体の動きを使って「思いのままに表す活動」（第2学年）や，思いに合わせて体の動きを工夫したり音やものと組み合わせたりして「思いが伝わるように表す活動」（第3・4学年）が内容となる新しい題材が開発された。その内の，映像と指導案が現存する7つの新課題について，次の条件を満たしているかを探った。

a. 体をいっぱいに使って表現する学びか。
b. 活動が狭められたり方法が限定されたりしていないか。
c. 自由に表現活動を行き来できる学びか。

その結果，例えば，第2学年の「スーパーにらめっこ」では，アップップのリズムに合わせて体全体でポーズをとるあそびから，自然にお面やしかけをつくるものづくりや楽器を使ってアップアップのリズムを打つ，つなぐ，速くするなどの活動が始まり，後半はそれらの表現活動を当然のように行き来きして楽しむ子どもたちの姿を観察することができた。また第3学年の「わくわくシルエット」も，まずスクリーンの前で体全体を使って動いたり，光源からの距離を変えてシルエットの大きさを変えたりして遊び，次第にセロファンや文房具を使ってシルエットを面白くする活動や，シルエットにふさわしい音を工夫する活動に入っていった。中には，興味のある活動にこだわり続ける児童もいたが，多くは自由に表現活動を行き来し，一人の教師では対応が困難なほど多様な活動の展開が見られた。同様に他の新題材・実践も，先の条件（a～c）を満たしており，それぞれの題材が，子どもたちの表現活動を先取りしていたことを確認した。

また，聞き取り調査からは，表現科の体験がないこれまでの5年生との違いを，現5年生の表現学習の実態に見いだすことができた。それは，例えば，今年度他校から着任した教員（音楽科）の，音楽を特徴づけている要素を感じ取って演奏したり，身体表現したり，つくったり，5年生の表現活動への意欲の高さに驚かされたや，実際に表現科を担当した教員（図工科）の，あれもできるこれもできると際限なく発想が出てくる，といったものであり，これらの印象が表現科の成果であると断定するには無理があるとしても，スムーズな教科学習への移行と，表現科の延長を感じさせるような教科学習の変容は明らかである。

Ⅲ おわりに

附小が試行した表現科は，本来の再編の目的に沿い，結果も評価に値するものであった。しかし，中心となるはずの身体表現を指導できる教員の不在は大きく，自立した価値領域と信じてきた教科からの逸脱を懸念する声を押し返すほどの顕著な成果を挙げることは難しかった。分野の括りが曖昧になっている芸術の今日に目を向けるならば，教科に細分化する前段階で，思いのまま自由に表現する楽しさを十分に味わう表現科は，芸術教育にとっては意味を持つ試行と言える。今後は，教科で学んだことを融合する合科や総合的な学習の時間の取り扱いとは別物として，可能性を追究していきたい。